

漢字文化圏における近代西洋新概念の受容・交流・共有・異化に関する研究

研究代表者 関西大学 外国語教育研究機構 教授 沈国威

目次

創造と交流

1 はじめに：西学東漸と近代語彙	3.1 中国から日本へ
2 漢字文化圏における新語の創造	3.2 日本から中国へ
2.1 中国の場合	3.3 さらに視野を広げて
2.2 日本の場合	4 現代中国語における日本借用語
2.3 偶然の一致と共同作業	5 終わりに：これからの課題
3 漢字文化圏における近代語彙の交流	

1 はじめに：西学東漸と近代語彙

今日われわれが何気なく使っている知的語彙（生活密着語彙ではないという意味で）、例えば「社会、選挙、前提、命題、論理、資産、現金」などがどこから来たのか——つまり何時、誰がどのような文脈で最初に使って、またどのように普及し定着したかを問うてみたことがあるだろうか。また、ご承知のように、中国語と日本語の中に、例えば上記の他に「暗示、安楽死、温度計、意志、遺伝子、化学、細胞、進化、哲学、熱帯…」など多くの同形語が存在している（字形上、或いは意味上の相違を別問題にする）。これらの同形語は、漢字が使用されている中国と日本で別々に作られて、偶然に一致してしまったケースもあるだろうが、やはり一方が他方から借用したと考えるほうが自然であろう。このような語のほとんどは17世紀以降、西洋文明を受容するために造られた新語・訳語であり、発生的に西学東漸という文明伝播の流れと切っても切れない関係にある。これらの語について日本では（主に国語学の研究では）「新漢語」「知的語彙」と呼ばれ、中国では「新名詞」「文明詞」と呼ばれているが、それぞれ造語の時期、意味上の特徴を捉えた名称と言えよう。ここでは、創造と交流をキーワードに、両言語における近代語彙の交流とそれに関する研究について概観したいと思う。

2 漢字文化圏における新語の創造

2.1 中国の場合

明末清初に来華したカトリック宣教師（イエズス会士〔耶蘇会士〕が中心）は、中国での布教を有利に進めるため、西洋の学問を紹介する洋学書を多く翻訳・出版した。その過程で多くの新語、訳語が考案されたことが容易に想像できよう。しかし18世紀に入り清王朝による厳格な禁教政策の実施に伴い、布教とともに西洋学問の流入も停止した。

イエズス会士らによる西洋文明の紹介を、「西学東漸」の第1波とすれば、19世紀の

初頭、禁教による百年以上の隔たりを経て、中国の東南沿海部にやってきたプロテスタントの宣教師たちは、西学東漸の第2波を引き起こしたということになる¹。厳しいキリスト教禁制下で布教活動を再開したプロテスタントの宣教師は、文書伝道の方式を採らざるを得ず、また中国人の迷信、外国蔑視の因習を打破するため、宗教以外の書物の出版にも力を入れた。天文学、地理、数学などの分野ではイエズス会士らが大きな遺産を残したが²、筆者は、19世紀は中国語の近代語彙の重要な造出期と考えている。もちろんこの百年の期間は、均質的なものではなく、次のように細分することができる。

●準備期：1807年～1840年頃

1807年は、最初のプロテスタント宣教師、モリソンの広州上陸の年である。キリスト教の禁制下でモリソン、及びこの時期に来華した宣教師たちが辞書の編纂、聖書の翻訳、定期刊行物の出版などの仕事を通じて、キリスト教、及び西洋全般に関する知識を普及させようと大きな努力を払った。熊月之によれば³、アヘン戦争（1842）までに出版された新聞・雑誌、洋学書は138点（辞書類を含まない）にのぼっている。内訳は、宗教書106点、世界史、地理、科学知識関係のもの32点である。この時期の出版物にある知識や語彙が、中国人による世界地理の書：『海国図志』（1843）、『瀛環志略』（1848）等に吸収されたり、次の発展期において重版、改訂版などの形で広く再利用されたりしたことは特筆すべきであろう。

●発展期：1840～1860年頃

阿片戦争後、中国は開国を余儀なくされた。外国人の居住、布教などの制限が撤廃され、布教の中心が広州から上海に移った。宣教師による出版事業もいっそう活発になり、上海墨海書館の成立は、新時代の始まりを告げる事件であった。墨海書館では宣教師と中国文化人の協力によって多くの漢訳洋書が出版、或いは再版された。折しも西洋列強に開国を迫られた日本では、蘭学から英学への転換期で、中国の書物が多く輸入され、広く読まれた。漢訳洋書の語彙は、それまでの蘭学系の訳語に取って代わり、日本語に大きな影響を与えた。

●官製翻訳期：1860～1880年代

メドハースト（麦都思）、ワイリー（偉烈亜力）、エドキンズ（艾約瑟）の帰英や転任

¹ 16世紀末以降に来華したカトリック宣教師らによる著述を前期洋学書（或いは前期漢訳洋書）、19世紀以降に来華したプロテスタント宣教師らによる著述を後期洋学書（或いは後期漢訳洋書）と呼び分けている。佐藤亨『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社1986年17～19頁、荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に』白帝社1997年23～26頁、沈国威「新漢語に関する思考」『文林』（神戸松蔭女子大）第32号1998年37～61頁を参照。

² その遺産が継承されたかどうか、或いはどのように継承されたかは研究課題の1つである。沈国威・内田慶市著『近代啓蒙の足跡』2002年関西大学出版部

³ 熊月之『西学東漸與晚清社会』上海人民出版社1994年156頁

により、墨海書館は弱体化する。一方、清政府主導の北京同文館、上海広方言館（後に江南製造局翻訳館に合流）が設立され、翻訳事業の中心となった。墨海書館も江南製造局翻訳館に吸収される形で解消されたが、その翻訳手法（宣教師が口述、中国人協力者が筆録・潤色）がそのまま踏襲された。また翻訳書物の選定は、洋務派官僚の意向に忠実に従わざるを得なかったので、「西芸」という技術、製造関係の図書が中心となり、人文系のもは非常に少ない⁴。従って化学、数学など一部の分野を除けば、日本語への影響が弱まっていく。

●停滞期：1880～1895年

この十数年は、政治的にも閉塞感の強い時期であった。政府主宰の翻訳機関における翻訳方法と内容は、時代の変化に順応できず、旧態依然であった。訳語・新語の考案、統一は例えば宣教師大会で議題となって決議も成されたが、行動を伴わず、議論だけに終わってしまった⁵。一方、日本では明治20年代（1888）に入ってから、学術用語集、国語辞書が相次いで出版され、近代語彙の整備が着実に進められ、完成を見ようとしていた。日本語は、もはや中国から訳語・新語を借用する必要がなくなった。それどころかそれまでの状況を一変させ、中国に訳語を借用することから中国をはじめ他の漢字圏の国々へ新漢語を輸出する立場に変わったのである。この時期に中国の文人、官吏が、観光や公使館駐在、視察などの目的で日本を訪れるようになり、直に日本語に接することができた。彼らは視察報告や紀行文などに日本製の新漢語を多く使用したが、日清戦争の終結まで、これらの書物は殆ど中国人の関心を引くことがなかった⁶。

●日本語導入期：1895～1919年

日清戦争の敗戦を契機に中国人の目は一斉に日本に向けられ、情報源を日本に求めるようになった。日本留学、日本書の翻訳がブームとなり、大量の日本製新漢語が導入された。日本語からの語彙借用は、大きな社会的反発を引き起こしたが、事態が沈静してみると、殆どの「新名詞」は日本製という結果になった。

このように中国語近代の新語、訳語が主に漢訳洋書と日本の新漢語に由来していたことが分かる。中国では少なくとも厳復まで新語・訳語の創造が自主的、積極的に行われたことはなかったと言える⁷。

⁴ 重要なものに『公法会通』（丁韪良 1880）『富国策』（丁韪良 1881）『佐治芻言』（傅蘭雅 1885）などがある。前2点の出版は、岸田吟香が深く関係したことが知られている。

⁵ 王樹槐 1969「清末翻訳名詞的統一問題」『近代史研究所集刊』第1期；王揚宗 1991「清末益智書会統一科技術語工作述評」『中国科技史料』Vol.12

⁶ 沈国威『近代日中語彙交流史——新漢語の形成と受容』笠間書院 1994年 75～130頁

⁷ もちろん漢訳洋書は日本の新漢語の大きな提供源であることを忘れてはいけない。また漢訳洋書の語彙でも日本経由で中国に戻ってきたものも少なくない。

2.2 日本の場合

日本でいつの時代から、意識的に漢字による造語が行われるようになったのか。中世までを漢語の受容、浸透の時期と見て差し支えない。新語の造出が、無論なかったわけではないが、それらは漢籍にある既成語の変用、或いは誤用という見方が可能であろう。漢字の自主的運用という意識はなお存在していなかったと考えられる。

近世に入り、漢語の使用は一変する。今日までの漢語隆盛の幕開けとなるものであるが、この数百年の漢語の歩みは、常に外来文明の受容というバックグラウンドのもとで行われたことに注意したい。

儒学と漢語

江戸期に幕府の文教政策として宋代の儒学が積極的に導入された。宋儒の書や漢籍一般が学習の対象になった。一方、町人社会の発展に伴い、宋代以来の白話小説の類も広い読者層を持つに至る。但しこのような状況が直接、新漢語の生成に繋がるわけではない。儒学などを語るには中国伝来の語彙だけで充分なはずで、新語を必ずしも必要としなかったからである。新語を創作せざるを得ない局面の発生は、蘭学に代表される西洋文明の東漸を待たなければならない。無論、近世以降、漢文は教育の重点項目であり、正式の文章、文字が漢文であったことが、漢字多用の傾向を加速させ、誤用、当て字を生みだし、漢字の通俗化を強力に促したことは否定できない。それが、和製漢語の大量生産の素地を用意したのである。朱子学、陽明学等の宋代儒学は、内容的先進性はともかくとして、その受容によって、漢語は、学問の語彙として普及し、その後、不動の地位を確立することになる。また「理学」「究理」等の儒学の用語が、後に西洋からの学問を表すのに、幕末の短い一時期にせよ、転用されたことは言及に値する。

蘭学者の新造語

漢字によって全く異なる文化を受け入れようとしたのが蘭学である。『解体新書』（1774）は、特筆すべき最初の挑戦である。杉田玄白らは、正式の漢文でオランダ書を翻訳した。訳出に際して既成の漢籍の語彙を用いる「翻訳」、既成の語彙が存在しない場合、訳語を創作する「義訳」、それに漢字音訳式の「直訳」の3つの翻訳法が採られたことは周知の通りである。『解体新書』（及びその後の蘭書翻訳一般）は、オランダ語に対して、はっきりと出典の求められる漢語を見つけて、置き換える「翻訳」が訳出作業の基本であった。「この書の直訳の所の文字は、皆漢人訳す所の西洋諸国の地名を取りて、（中略）一つも臆見を用いざるなり」（『解体新書』凡例）から分かるように、音訳語でさえも音韻体系の全く異なる漢語が規範となっていた。既成の漢籍語がある場合は、迷わずそれを優先的に選択した。江戸時代、すべての学問の基礎は漢学であり、漢文以外、文明摂取の媒体が存在していなかったのである。しかし、「漢人いまだ説かざる所の者」「漢人の説く所と異なる」ものについては、独自に訳語を創作し、「義訳」し

なければならなかった。和製漢語の出現である。「義訳」は形態素対応式の訳語制作法で、原語（オランダ語）に対する理解が前提になっていた。『解体新書』のような初期の蘭学書の場合は、「人々これまでに心に得し医道に比較し、速かに暁り得せしめんとするを第一とせり」（『蘭学事始』下）という理由で、無理な援用など既成語への妥協も余儀なくされたことが多かったようであるが、蘭学の進歩に従い、訳語とその表出内容の名実乖離を積極的に解消しようとする努力が見られるようになる。

「植学」という語の造出が、良い例である。箕作虔は『植学啓原』（宇田川榕菴 1834）の序文で「客嘲曰植学即本草耳。況其名不見于古。而杜撰命之」との非難を想定して、「本草は名に就き、ものを識別するに過ぎず、……究理の学と関係なく、植学は花、葉、根、核を解剖し、各器官の機能を分析する真の究理の学である」と指摘し、全く別個の学問ゆえ名称も異にすべきと、榕菴の命名を擁護した。このように、新語の創作は、意識的に行われたのである。これは、誤用でもなければ、表現の新奇さのみを追求したものでもない。まさしく表現形式を言表内容に肉薄させるという近代の科学精神の表れである。「植学」は、原語を形態素に分解し、それぞれの成分に漢字を対応させるというなぞり型訳語を越えて大きな一歩を踏み出したことになる。

『解体新書』のあと、『重訂解体新書』（1798 成、1826 刊）、『舎密開宗』（1837 - 47）等、重要な蘭学書が相次いで出版される。19 世紀前半までに解剖学、医学（特に眼科）、化学の基本用語は殆ど整備され、今日とほぼ同じ形になっていた。蘭学者たちは、訳語を蓄積し、自信を深め、漢字による造語の道を切り開いた。しかし、蘭学者たちの知識の下地も、語彙の拠り所もすべてが漢学（儒学）であったことも事実である。榕菴が、その著『舎密開宗』において、新語や新式の表現に「漢人にない」と断っている箇所が見える。また中国書からの引用に関して、明儒の書、五車韻府とあるように出典をはっきり示している。自分の訳語（表現）に対する一種の責任の持ち方と言えよう。ここでは漢籍を利用して訳語を考案した例として「共和」という語について見てみよう。

「共和」は、**republic** の訳語、「共和政治」の短略形。大槻磐溪の考案と言われる。西洋の政体に関する知識は蘭書を通じて 19 世紀の初頭までに、既に日本に伝来したが、「王ナクシテ支配サル、国、共治国」などと表現されて一定しなかった。世界地理の書『坤輿図識』（1845）を著した箕作省吾が、君主のない政体という概念を表す適当な訳語について大槻磐溪に教えを乞うたところ、君主のない国は変体ではあるが、古代中国にそのような例がないわけではない。周の時代に国王が無道の政治を行い、国民の怨みを買ひ、遂に出奔した時、周、召の二宰相が共に協力して、14 年間君主のない政治をした例がある。国王のない政体は、共和政治と言えよと助言した⁸。その後、「共和政治」という訳語は、蘭学系の辞書『袖珍英和对訳辞書』（1862）を経て、明治初期

⁸ 穂積陳重『法窓夜話』1992 年岩波文庫版 204～205 頁、大槻文彦『復軒雜纂』1902、齋藤毅『明治のことば』講談社 1977 年 129～174 頁

の独和、仏和、英和辞書などに受け継がれていった。

幕末・明治初期の新造語

幕末に蘭学から英学への転換が始まった。この転換に際して、夥しい数の中国洋学書の存在は、開国直後の日本知識人に大きな衝撃と興奮を与えたに違いない。中国では1807年、モリソンの渡来以降、広州などの沿海地方や東南アジアなどで数多くの洋学書が出版された。短い期間に編集されたモリソンの英華辞書(1815~1823)の完成度は、蘭和辞書のそれを越えていた。そして、日本の開国を想定して事前に作られた英和辞書を含めて、中国の洋学書が大量に日本に流入した。中国の洋学書の伝来は、漢籍依存の風潮を今までになく大きく助長させたのである。明治の思想家、啓蒙家、翻訳家、例えば福沢諭吉、西周、井上哲次郎、津田真道らは例外なく漢学、蘭学の背景を持っており、利用できた参考書は漢訳洋書や英華辞書に限られていた。したがって彼らが漢訳洋書、英華辞書から訳語を吸収したり、漢籍に訳語や訳語の製法を求めたりしたのは、むしろ当然の帰結と言えよう。日本の近代語彙に大きな影響を与えた西周の著述や井上哲次郎の『哲学字彙』における新語に漢籍の影響が特に顕著であった。このことは、訳語に付された注釈や出典説明を見ても明らかである。例えば西周は、西洋のフィロソフィーに対して、東洋の理学との相違を認識しつつ、漢籍語を踏まえて「哲学」を造語した。井上哲次郎の「演繹」や「範疇」に至っては、殆ど意味とは無関係に中国の古典にある文字列のみを借用したものとさえ言えよう。

2.3 偶然の一致と共同作業

中国語と日本語は、共に漢字を用い、また造語法においても多くの共通点を有するので、別々に考案された新語でも偶然にして同じ形を取る可能性が存在する。特に直訳による造語の場合、新訳語の同時発生が生じやすい。次の2例を見てみよう。

暗室

暗い部屋の意味を持つ「暗室」は、漢籍に見える。しかし写真現像用の「暗室」は、dark room の訳語として西洋の写真術の伝来によって生じた用語である。日本では幕末・明治初期から『写真鏡図経』(1867~1868)、『改正増補物理階梯』(1876)などに使用され今日に繋がる。一方中国では、1850年代にすでに宣教師によって西洋写真術が紹介された。例えば『英華萃林韻府』(1872)に写真関連の術語表が2つ掲載され、数百語が収録されていた(Photographical Chemicals and Apparatus. By John Thomson, Photographic Terms by J. Dudgeon)。そこでは dark room は、「黒房、闇室、修造暗室」と訳出されている。

化膿

蘭医学では炎症などにより膿が生じることを「化膿」という。例えば『厚生新編』では、化膿剤という項目があり、「内外諸科に於いて腫瘍の淤液を収斂して消散せしめず化膿を促して終に潰破せしめて其瘡を癒す劑なり」と記述されている。『医語類聚』

(1873) では「化膿」が少なくとも 5 つの原語に充てられていた。「化膿」は、明治初期にすでに医学用語として確立したのである。一方中国では、伝道医師ホブソン (合信) が、その著『西医略論』(1857) で「膿、蓄膿、生膿」などの表現を用い、また「肉死則化膿、故死肉多者膿必多」という 1 例も見える。但しこの「化膿」は、その後の氏の『医学英華字釈』(1858) に収録されていない。熟していない表現のためか。このようにホブソンの「化膿」は、そのまま現代中国語の「化膿」に繋がるかは疑問の余地があるが、造語の点において、日中両言語は偶然の一致を見たと言えよう。同時発生的な訳語は、語数が非常に少ない。

いわゆる共同作業には次の 2 つのパターンが考えられる。1) 語形、意味の加工、2) 普及・定着の促進である。1) について森岡健二は、明治初期の翻訳書における英華辞書の訳語を改正し、現代語に繋げた例を多く挙げている⁹。また漢籍の語に新しい意味を与え、訳語にする場合、意味・用法を重層化させることがしばしばある。例えば「友好関係」と「对不起→没关系」とでは、前者の「関係」は新しい意味で、後者は古い意味になる。

2) の例としては、「望遠鏡」、「細胞」があげられる。「望遠鏡」は、明末、西洋の TELESCOPE の伝来に伴って、発生した新語であって、成立した後、日本にも伝わった。明末の改暦に大いに活用された望遠鏡は、清に入ってから天文観察を司る欽天鑑では使い続けられていたが、洋学導入の停止によって一般社会との関わりが非常に小さくなった。したがって一般の文化人が使う「望遠鏡」という語も清末になって当時の文献から完全に姿を消した。現代中国語の「望遠鏡」は明代語彙の継承ではなく、日本から逆輸入されたものである¹⁰。

一方「細胞」は宇田川榕菴の『植学啓原』(1834) に使用されていたが、ここでは cell の訳語ではなかった。cell の訳語としての「細胞」は、1858 年李善蘭によって考案され、翻訳書『植物学』に使用している。李善蘭の「細胞」が、幕末に日本に伝わり、植物用語として定着したが、中国では、その後「細胞」ではなく、「微胞」「月+朱」が用いられていた。現代中国語にある「細胞」は、20 世紀初頭日本語の翻訳書を通じて再び導入され定着したものである¹¹。

「望遠鏡」「細胞」のように、ある訳語が日本と中国を行き来するうちに意味が補完され、一般化したケースが他にも多く存在している。

以上を総合すれば、新漢語の発生源は、大まかに言えば次の 5 項目である。

(1) 漢籍の語

⁹ 森岡健二『改訂近代語の成立—語彙編—』明治書院 1990 年 96～138 頁

¹⁰ 谷口知子「日中ことばの交流——「望遠鏡」を中心として」『中国語学』2001 年 307～323 頁

¹¹ 沈国威『植学啓原と植物学の語彙——近代日中植物学用語の形成と交流』関西大学出版部 2000 年

- (2) 仏典の語
- (3) 蘭学書の訳語
- (4) 漢訳洋学書の訳語 (17世紀のイエズス会宣教師らの著述を前期洋学書、19世紀のプロテスタント宣教師の著述を後期洋学書と呼び分けることも可能)
- (5) 幕末、明治期の日本人による新造語

しかし留意しなければならないことは、それぞれの項目は、決して無関係ではないということである。例えば(3)は、(1)、(2)の語を手本に製作されたケースが多いし、(5)は、(1) - (4)を踏まえて製作されたことは言うまでもないであろう。(3)、(4)は承前啓後の意味において、近代新漢語研究の要ではあるが、(1)、(2)の語は、明治期に入って西洋からの新しい意味を獲得したものも少なくない。『英華字典』の中国語序文に「重抽旧緒、別出新詮」という表現がある。古典語に近代的な意味を新たに付与することを意味している。これは近代では盛んに用いられた新語創出方法の1つである。しかし、新旧意味間の関連性や、新しい意味の付け方など複雑な問題が存在している。例えば「経済、意匠、選挙」などが『六合叢談』に使用されており、新旧意味の間に本当に切れ目が認められるかどうか。いずれも今後の研究の中で解明しなければならない問題である。

3 漢字文化圏における近代語彙の交流

3.1 中国から日本へ

17世紀、18世紀というまでもなく、明治維新後もしばらくの間、つまり前述した官製翻訳期(1860~1880)まで、中国語が日本語に影響を与えた時期と考えてよい。洋書の禁が緩んだ1720年以降、天文学、地理、数学に関するイエズス会士らの著述が蘭学者たちの基本参考書となり、訳語の借用も行われたが¹²、しかし中国製訳語の大量流入はやはり幕末・明治初期であった。漢訳洋書、英華辞典、定期刊行物などが新語伝来の媒体である。ちょうどその時期に日本では蘭学から英学への転換が図られ、中国製の訳語が、本場のものとして重宝され、それまでの蘭学の訳語に取って代わった例が多く見られる。例えば「舎密→化学」、「植学→植物学」、「消極→陰極」、「積極→陽極」、「越歴→電気」などである。幕末期に日本で最も読まれた洋学書の1つ、ホブソンの『全体新論』から「炎症」「~炎」「精奇水」や雑誌『六合叢談』から「議院」「国会」などが日本語に取り入れられたことも知られている事実である。ここでは少し具体例について見よう。

¹² 『解体新書』(1774)などの蘭医書を訳出するにあたって、蘭学者たちはイエズス会士らの著作を公然と引用することが憚れたようだが、洋学書の影響下にあった中国文人の書物、例えば『物理小識』(方以智)などが参考書になっていたことが明らかになっている。

「舎密」から「化学」へ

「舎密」は、オランダ語の音訳で、18世紀末に日本で造語され、『舎密開宗』によって普及し、明治初期までは一般に使用されていた¹³。「舎密」がそのまま明治の新語として継承される可能性は大であった。ところが、幕末に中国製の訳語「化学」が『六合叢談』（1857～1858）『重学浅説』（1858）を通じて日本に伝わってき、川本幸民が使用しはじめ、「舎密」と競合するようになる。「舎密」を「化学」に改めようとする宇都宮三郎（精錬方手伝出方）の提言に対して、開成所頭取林大学頭が「化学とは変な学ではないか、化学と云ふのは、なんだか変に聞こえる」と反応したという。しかし、宇都宮三郎の「ソレは変な字の様だが支那ではそう称へる。第一化学入門と云ふ書物が来て居る」という言葉に説得され、1864年（元治元年）4月、名称改正の建白を出した。建白の中に、「セイミ学を以、化学と相唱へ候支那訳例も相見へ、字義相当仕候様被レ存候間、以来精錬方之文字、化学と相改、出役之者共ハ化学教授出役、…」という文面がある¹⁴。名称改正の理由に「支那訳例も相見え」と「字義相当」の2点が上げられている。しかし、「化学」は本当に「舎密」より「字義相当」であったのか。詳しいことは拙論「訳語“化学”の誕生」を参照されたいが、「化学」という語が、必ずしも近代的な意味合いばかり持つものではないことだけ指摘しておきたい。つまり改名にあたって「支那訳例も相見える」以外に、積極的な理由がなかったと言わなければならない。林大学頭の建白により「舎密、化学」の競合はあっけなく終止符が打たれ、1880年前後、「舎密」は廃語となる。ちなみに中国で本格的な化学の訳書が出版されたのは、1870年代に入ってからのもので、フライヤの一連の化学の訳書を通じて「化学」という語が一般化した。

「植学」から「植物学」へ

前述したように「植学」は中国の本草と区別するために独自に考案された訳語であった。しかし、「舎密」と同じように「植学」もあっけなくその座を中国からの新しい訳語「植物学」に譲ることになる。中国の洋学書『植物学』（韋廉臣・李善蘭・艾約瑟共訳）が出版されたのは、1858年であったが、その翌年にすでに日本に持ち込まれた。1867年（慶応3年）の翻刻本を含めてかなり流布していたものと考えられる。その後、中国製の「植物学」が和製の「植学」に取って代わり急速に一般化した。これも訳語そのものの優劣というより、幕末・明治初期の中国洋学書への崇拜の風潮に帰することが出来よう。

「健全学」から「衛生学」へ

「衛生」は荘子に用いられている古典語で、明・清の間にも「衛生」を冠する医書が多く出版された。明治初期、「衛生」が新訳語として登場し、政府機関名にも使用され

¹³ 「化学」について沈国威編著『『六合叢談』（1857 - 58）の学際的研究』白帝社2000年95～116頁参照されたい。

¹⁴ 倉沢剛『幕末教育史の研究一』吉川弘文館1983年306頁

た。命名者長与専齋によれば、訳語候補に「養生」があったが漢籍に見えない「健全」は最初から問題外であった。「健全」は蘭学者に考案された訳語で、『健全学』という書名の蘭学書があり、明治期に入ってから「健全学」は、大学の講座名にもなっていたが、「衛生」の定着に従って交替が起こり、明治 20 年代に消滅した。因みに「衛生局」の命名者、長与氏が見学に来た中国の役人、傅雲龍にその命名の当否を確認したエピソードもある。

明治 10 年代以降、漢訳洋書の持ち込みが徐々に減少していくに従って、上記の停滞期 (1880~1895) では、中国製訳語の流入が殆ど止まったと見てよいであろう。もちろん例外は存在している。「前立腺」は興味深い例と言えよう。小川鼎三によれば、日本解剖学会の解剖用語改訂委員会は、(旧) 摂護腺の摂護が難しいばかりでなく意味が不明瞭なので、第 1 次委員会 (1929) は“前位腺”を暫定的に認めたが、第 2 次委員会 (1940) は更に一步進めて中国用語に倣って「摂護腺」を正式に「前立腺」と改めたという¹⁵。(但し中国語は現在「前列腺」)

近世以来、どのような洋学語が日本語に入ったかという問題に関して、日本の国語学界では近代語の形成という角度から研究が積み重ねられてきた。2001 年『日本国語大辞典』改訂版が完成した。この辞書の中で、500 前後の近代新漢語について、「語誌」を付けている。これにより研究のさらなる進展が期待される。

3.2 日本から中国へ

日本語がいつから中国語に影響を与え始めたのだろうか。人的交流の少なかった時代のことだから、書物は新語を搬入する唯一の媒体と言えよう。しかし中国書の日本流入と対照的に日本書の中国流入は、19 世紀末まで極めて稀な例である。例えば数多くの蘭学書は中国で読まれた痕跡がない。筆者は、計量語彙論の方法で李善蘭らが『植学啓原』(1834) を参照することなく、独自に『植物学』(1858) を訳出したことを立証した。このような状況が 1860 年代の後半まで続いたと考えている。これはつまりそれまでに発生した新漢語が、同形であれば、偶然の一致によるものか、日本語が中国語から借用したものかのどちらかであるということになる。逆のことはまず考えられない¹⁶。しかし 1860 年代以降、2 つのルートで日本語の書面語が中国に入っていくようになる。1 つは、日本と中国を行き来した宣教師たちによる日本の書物の持ち込み。もう 1 つは、日本の新聞の流入である。ただし 2 つのルートとそれを經由して入ってきた日本語の語彙の実態に関してまだ確実に何かが言える段階まで研究が進んでいないのが現状である。

¹⁵ 小川鼎三『医学用語のおこり』東京書籍 1983 年

¹⁶ 舒志田は『解体新書』と『全体新論』の訳語の一致について、「当時の中国プロテスタント宣教師らの翻訳事情から、上記の訳語の一致は日本側からの影響による可能性も完全に否定することはできない」と指摘しているが、氏の結論は検討を要する。『国語学』第 53 卷 1 号 2002 年 154~155 頁

ここでは新聞について少し述べてみたい。書物と違って、日本の新聞が明治初期から中国に入り、宣教師、及び新聞関係者の間で読まれ、ニュースソースの1つになっていた。中国の新聞『申報』(1872)は、創刊してまもなく「日本近事」欄を始め、日本の新聞記事を訳出するようになった。日清戦争後『時務報』(1896～1898)や『清議報』(1898～1901)が創刊され、日本の新聞記事の中国語訳が多く掲載されていた。日本発情報の重要性が増してくるにつれ、日本語が中国のメディアを通じて流入し始めた。例えば『時務報』の「東文報訳」欄に使用されている日本語は、数百語(異なり語数)に上っている¹⁷。

このように日本語の中国語への実質的な影響は、日清戦争後と見て差し支えなかろう。中国官吏による日本視察報告や日本訪問記もこの時期になって初めて一般に読まれるようになった。

日本語流入のピークは、留学生たちが本格的に翻訳活動を開始した1900年からの10年間と考えられる。翻訳書(日本語からの翻訳、重訳)、教科書類(その多くは日本の教科書の粗悪な直訳もの)が数多く出版され、日本製の訳語が徐々に社会全体に浸透していく。最初の近代国語辞書『辞源』(1915)の出版は、中国語の近代語彙体系が完成に向かう1つの到達点を示すものである。1919年の五四新文化運動以降、高度な、特殊な専門用語の他に、社会主義運動の革命語彙、文学用語、時事語が引き続き伝来し、また、既に入ってきた語も、中国語の語彙体系に融合され、日本語と異なる道を歩みはじめた。次節で現代中国語の中にある日本借用語の実態について少し詳しくみたいと思う。

3.3 さらに視野を広げて

朝鮮語、ベトナム語の近代語彙に日本、中国と同形のものが多く存在している。この現象も近代語彙交流の結果と見なければならぬ。韓国ソウル大学付属図書館、奎章閣に近代の漢訳洋書が200数十点所蔵されている。刊行年次、版本などから1880年代に朝鮮半島に持ち込まれたものと判断できる。これらの書物が朝鮮語にどんな影響を与えたかについて、韓国の学者が研究を進めているところだと聞いている。近代語彙交流の研究は、漢字文化圏に視野を広げる必要がある。

4 現代中国語における日本借用語

現代中国語において日本語が何らかの形で関与した語に、およそ次のようなタイプのものがある(イ、ロの括弧の中は日本語)。

(イ) 夏普(シャープ)、索尼(ソニー)、榻榻密(畳)

(ロ) 鮑氷(かき氷)、紅豆飯(赤飯)、接力馬拉松(駅伝)

¹⁷ 沈国威ほか1998『『時務報』と日本借用語』松下国際財団研究助成報告書。

- (ハ) 民主、共和、革命、社会、経済、関係、影響
- (ニ) 哲学、命題、抽象、主観、客観、肯定、否定
- (ホ) 手続、取締、引渡、見習、場合、場所
- (ヘ) 腺、糲、耗、料

(イ)、(ロ) は中国人による造語で、厳密な意味での外来語ではないかもしれない。

(ハ) は、中国の古典に見られる語であるが、幕末・明治初期以降、日本において西洋伝来の新しい概念が付与されたものである。既成の語形に新しい概念を結合させたにすぎないという意味では百パーセント日本人による新造語と言えない側面もある。

(ニ) は、幕末・明治初期以降、日本人によって新語、訳語として考案されたものである（「瓦斯」「倶楽部」などの漢字音訳語もこの項で扱うことが可能である。但し、数は非常に少ない）。中国語に流入した日本語語彙の大部分がこのタイプに属する。

(ホ) は、訓読される日本の固有語であるが（「場所」のような混種語もある）、漢字語形のまま、中国語に移入されたものである。語数は（ハ）、（ニ）より遥かに少ない。これらの語は、発生的に近世の江戸語まで遡ることができるものもあるが、近代以前の語としてではなく、あくまでも西洋伝来の新概念の担い手、或いは西洋的な文脈（例えば、法律の文言の「手続」「取締」「引渡」など）における用語として中国に伝わったものである。従って文明交流史においては、（ハ）、（ニ）の語と同質のものとして認識する必要がある。

(ヘ) は、いわゆる「国字」で、現代中国語でもなお使用されているのは「腺」だけのようなものである。

以上、(イ)～(ヘ) は、言語接触によって引き起こされた語彙交流に関する研究において、すべて考察の対象になり得るものであるが、ここでは、(ハ、ニ、ホ) の語に限定して、考えていきたい¹⁸。

中国語に借用された日本語の語彙について、一、どれくらいの語が入ってきたか、二、実際にどのように使用されているか、という 2 点をまず明らかにしなければならない。

日本語からの語彙の量について、これまでに、幾つかの語彙リストが示されている。例えば (1) 高名凱・劉正燊 (1958) 459 語、(2) 王立達 (1958) 589 語、(3) 劉正燊等 (1984) 892 語、などである¹⁹。これらのリストには、意味更新を経た中国古典語なども多数含まれており、すべて日本人による新造語と見なすことはできないが、最も語彙

¹⁸ 近年の文化交流によって、「料理、人気、新幹線、特許、空調中」などの日本語が中国のメディアを賑わしている。ただしこのような現在進行中の事態については社会言語学的な見地から研究するほうが妥当であろう。

¹⁹ 高名凱・劉正燊『現代漢語外来詞研究』(1958) 文字改革出版社、王立達「現代漢語中従日語借来的詞彙」『中国語文』(1958) 68 期、劉正燊等『漢語外来詞詞典』(1984) 上海辞書出版社

数の多い劉正燏等（1984）について見ると、(二)に当たる日本製の訳語が500語余り数えられている（中には中国で作られた新語、訳語を日本製のものと誤認したものもある）。これらのリストは日本語からの語彙を網羅し尽くしたという訳ではもちろんない。実際の語数は、それより遥かに多いと推測される。上記リストの収録語は、学術分野によって大きな偏りがあるからである。政治、経済、法律、哲学などの人文科学系の用語が多く収録されている一方、自然科学系の用語が一部の分野では多く欠落している。例えば20世紀初頭まで伝統医学が足枷になって確立が日本より大幅に遅れた医学の分野では、病名をはじめ、医学理論、人体解剖、診療実践、医療器具などに関する用語の多くは日本語から導入されているが、「血圧計」「内耳」「分泌」「偏執狂」「免疫」などが上記のリストには見当たらない。このような学術用語において日本製の訳語が相当の数にのぼると推定される。

日本語からの語彙についての実態調査が進まない理由に、日本製の訳語も、同じく漢字を用いており、その出自の認定に様々な困難を伴うことが挙げられる。また中国では、近代語彙の形成に関する研究がまだ本格的に展開されていないのも、この困難を増幅させている。

日本語からの語彙は中国語に入ってから、在来の語彙と競合しながら定着していくのであるが、その過程で、表記、意味、用法の面において色々な変化が生じた語が少なくない。ここでは、化石化現象の例を2つほど示しておきたい。いわゆる「化石化現象」とは、異なる言語体系に入った外来要素が、変化を止め、元の意味・用法をキープする現象を指す。日本語に入った古典中国語の語彙が、昔の意味を保持しているものが多数存在していることは周知の事実である。近代以降、中国語に入った日本語の語彙もこのような現象が起きている。

「栄養」と「營養」

中国古典語の「營養(栄養)」が、蘭医学の訳書に使用された後、明治初期に既に nutrition の訳語として定着した（『解体学語箋』（1871））。『医語類聚』（1873）では、「栄養」以外に、「栄養減少、栄養過多、栄養不給、栄養缺乏、栄養論、栄養機失宜、不栄養」など多くの複合語が収められていたことはその証左と言える。表記は明治初期までの蘭学系の医書や『医語類聚』が「栄養」であったのに対して、明治期に入ってから外国語辞書などでは「營養」が一般的であった。しかし1891年頃から、留学から帰ってきた学者によって、栄養学の研究が大いに進められ、大正4年（1915）佐伯矩が「栄養研究所」を創設、同9年に内務省に「栄養研究所」が設けられた。「栄養」が固有名詞に使用されたため、その頃から「營養→栄養」の表記換えが行われた。一方、中国は20世紀初頭に新漢語としての「營養」を借用したが、『新爾雅』（1903）などは、いずれも「營養」であった）日本の表記換えに連動せず、今日まで「營養」のままである。

「記念」と「紀念」

漢籍に出典を持つ語。近代以降も、『英華字典』（1866 - 69）に「Memory, to call to

memory 記念、憶起」とあり、本来、動詞であったことは明らかである。日本では、明治初期に、「記念のため」という句の形式で多く用いられ、意味も、思い出を喚起する媒介物から、記憶を呼び起こすために行事を行うこと、またその行事へと発展していった。但し、表記としては明治期に辞書類などに「記念、記念」の併記も見られるが、実際の用例としては、「記念」の方が圧倒的に多かった。ところが、大正期に入る前後に「記念」は誤用として矯正され、「記念」が正しい表記として定着した。

一方、中国近代以前の文献では「記念」が見えないが、20世紀初頭に日本書の中国語訳を通じて「記念」が「思い出を喚起するために行事を行うこと、またその行事」という新しい意味と共に中国語に移入され、一般化した。しかしそれより後に日本で行われた「記念→記念」の表記の是正は、中国語に影響を与えることができなかった。

上記の例語から、元々同一のものが分化していく様子を見て取ることが出来る。このような例として他に「鍛錬、細菌…」など多数挙げられる。

日本製新語・訳語が実際に中国語ではどのように使用されているかは、結局個々の語についての語誌によってしか記述できない問題であるかも知れない。その意味では個人的研究の範囲を遥かに越える課題となる。これがこれまでの研究に体系的な視点が欠けていたと言わざるを得ない現状を招いた原因にもなっていると思われる。今後の日本製漢語に関する研究においては、近代語彙の形成という視点の導入が是非とも必要なものとなるだろう。同時に、20世紀初頭にいったん中国語に移入し、それなりに使用されたが、結局中国語に定着せず、最終的に消滅した日本語からの借用語についても注意を払わなければならない。いかなる原因によって消滅したかを分析することは、漢字訳語、新語の異言語間における流布と受容のメカニズムの解明に有益な示唆を与えるはずであろう。

5 終わりに：これからの課題

漢字文化圏における近代西洋文明の受容という見地から漢字語の形成とそれをめぐる語彙交流は、真剣に取り組むべき課題と考えている。具体的には、

1. 国際・学際的研究の展開
2. 近代新語・訳語の発生と交流を記述する漢字文化圏近代新語・訳語辞典の編纂を進めていく予定である。(辞書編纂に関しては、4月1日より筆者のホームページにて公開する：<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~shkky/>)

付記：本論文は、JFE 21世紀財団の研究助成によるものである。JFE 21世紀財団のご支援に対し、衷心より謝意を申し上げる。